

# 半農半アート通信

持続可能な農村とアートの関係を考える。半農半アート研究会公式ニュースレター



11/14 (日) 唄って踊って味わう八女茶山2021。武田力さんをお迎えし、九州大学ソーシャルアートラボもスタッフとして参加

## 第2回研究会は、アーティストからみる半農半アート

2回目となる半農半アート研究会が、10月25日、オンラインで開催されました。今回のゲストスピーカーは、民俗芸能アーカイバーの武田力さん、山山アートセンター代表で美術家のイシワタマリさん。

まず、武田力さんから、滋賀県高島市朽木古屋集落での、六斎念仏踊りの継承について話を聞きました。

武田さんは、過疎により一旦途絶えてしまったこの民俗芸能を、地域内外の人々とともに継承するプロジェクトのメンバーとして2016年に招聘。現在まで関わり続けています。「当初、集落の人々からはどこの馬の骨が来たんだという感じだった」けれど、踊りを覚え、地域と対話を重ねながら真摯に継承していくことが、期せずして滞在型の「アーティストインレジデンス」のようになったこと、芸能継承者の孫世代も、じわじわと融和していき、継承者となったことなどを語ってくれました。

## 「馬の骨」だけど排除はされない

次に、イシワタマリさん。2012年、結婚をきっかけに京都府福知山に移住したけれど、「そこは誰もアートを必要としていない町だった」。どこに行っても誰と話せばいいかわからず、直感的に選んだのが、三岳地区という山間部。アートが誰にも伝わらない場所で、地域の人に伝えることを試みようとして「山山アートセンター」という看板を掲げます。キャッチコピーは「とにかく生きよう」。世界中の山々にいろんな境界線を越えるカギがある。アートにこだわりを持ちすぎず、自分も畑を耕すことで、集落の人たちとのコミュニケーションを試みていきました。「私は馬の骨なんだけど、排除はされない。すごい噛み合っていないけど優しく、大事にしてくれる。だから自分もそれを返したい。1年の畑のサイクルを体験することでやっとちょっとずつ共通言語が生まれているような気がします」

後半のフリートークでは、NPO法人山村塾理事長・小森耕太さんと、九州大学社会包摂デザインイニシアテ

ィブから、朝廣和夫、長津結一郎も加わり、「作品と農村」の関係についても語り合いました。

武田さんは「六斎念仏は僕のものではないし、古老たちのものでもない。農村では自分の作品としてそれを見せるのが重要ではなく、むしろそうした自我を手放した先に面白いなにかが見つかるんじゃないか」と語りました。

イシワタさんは、「農村に来て、どんどん作品制作をしなくなってる。何が自分の作品であるかを主張しない分しらがみなくなり、自分が自然の中の小さな一部だということを当たり前で体感することで、解放される部分がある」といいます。

## 「お互いに消費しない関係

「アートが農を、農がアートを、消費しない関係。互恵的であること」が大切という共通認識も生まれました。

最後にお二人から、これから農村に入るアーティストに向けてのメッセージです。「創作の前に、その土地とコミュニケーションをとり、生活を共にすること」(武田さん)「まずは草刈りに困っている人がいたら一緒に刈ること」(イシワタさん)。(了)

# 半作品、アートの視点、農ある暮らし…

研究会後のアンケートに寄せられた参加者の声を紹介します。

## 半農と名乗ることで…

半農と名乗ることそのものが「アート軸足ではなく、農とつながっている人と対話してこそ進むことができることを知っています」という意思表示に実はなっているのかもなと感じました。

(アートマネジメント関係者)

## 何気ないことをアートとして見つめる

お互いに消費しないアートと生活の関係について考えていましたが、このお話を聞いて、アートとはつまり、視点なんじゃないかなと思いました。何気ないことをアートとして見つめる、まなざす視点。何か実質的に変化を求めなくても、そう見つめることで新しい素敵さを生むみたいなことかなと。

(アーティスト)

## BODY と FORM

京都で町家改修に携わっているが、その過程で感じたことに、body と form という言葉がしっくりきた。外からやってきた馬の骨が、自己主張をするのではなく、同じ時間・場を過ごし、融和していく。この流れは、自身の経験と重なることが多い。これからは、よりそういう点に着目しながら、周りで起こる事象にあてはめて見ていこうと思った。

(Sさん)

どの集落でもアートがあったら、つながりが強くなりそう

(Fさん)

## 地域と暮らすことの中にアートを見つける

自分の作品を作ることに拘らずに、地域と暮らすことの中にアートを見つけていることがとても新鮮でした。イシワタさんも武田さんも自分の作品が薄まってそれが無理なく良いと思えている感覚が非常によかった。地域とアーティストがお互い消費しない関係というのはアートと言う枠を超え、どう生きるかと言うことにつながっていると感じ、これからの自分の課題の道筋にもなり、非常に共感できました

(Aさん)

イシワタさんの、「アートがライフラインになる」という考えがとても新しかった。

(大学生)

## アートとは…の答えを探していましたが

「アートとは」という自分なりの答えを探してみたとしても中々難しく、答えが浮かばなかったのですが、「自分が自分でいいんだ!と教えてくれる、思わせてくれるものである」とイシワタさんから聞いたとき、とても納得しましたし、他人と比較する機会が増えた現代において、アートがとても重要な役割をしていると感じ、よりアートに興味を持つようになりました。(自分の専攻外なのですが…)農業に関しても「大きい自然の中の一部にいるんだ」と思わせてくれるという、その言葉のチョイスに心惹かれました。

(大学生)

## 人によって割合が違う？

「アーティストインレジデンスで地域とかかわる=1農9アート」から「生業としての半農半アート=5農5アート」そして「もはやほとんど農それがアート=9農1アート」まで、それぞれ人によって割合がちがうのだろうなと想像させられました。

(アーティスト)

## 関わるには時間がかかる

中山間地域の過疎地でアートに関わっていくには時間がかかること、かかわる密度も重要。私自身が過疎地にある民家を借りているが、都市に生活拠点を置いているのでどうしても薄くなる。そこをどうすればいいのか改めて考える機会を持てた。

(地域団体所属)

## 「半分作品」にヒントをもらえた

私自身は美学研究をしていますので、武田さんが六斎念仏踊りの継承を「半分作品」と表現されていたことに(記憶違いだったらすみません)考えるヒントをいただいたと思います。

(研究者)

## 第3回半農半アート研究会「農からみる半農半アート」

2021年12月13日(月) 19:00~20:30 会場:オンライン(ZOOM)

対象者:里山保全や半農半アートに興味関心がある方

事前申込制。右記のURLにアクセスし、申込事項に記入をお願いします。

## 半農半アート研究会とは…

九州大学大学院芸術工学研究院附属社会包摂デザイン・イニシアティブ内、ソーシャルアトラボが主催する研究会です。「半農半アート」のライフスタイルを基盤とした包摂型地域づくりや農業ボランティアの新しい仕組みモデルについて考えます。年度末にはフォーラムの開催も予定しています。



↑詳しくは九州大学  
社会包摂デザイン・  
イニシアティブHPへ